

シリーズ 私の一冊の本

環境科学研究所 唐木晋一郎 先生

白井隆一郎著

『コーヒーが廻り世界史が廻る 近代市民社会の黒い血液』

閲覧室 2階 中公/1095 中央公論社新社 出版

朝 研究室の一日は一杯の珈琲からはじまる。地球儀型の古めかしい手動製粉機に吸い込まれてゆく焙煎されてまだ間もない珈琲豆。取手から伝わってくる、やや粗く挽かれる豆の硬さと立ち昇る芳醇な芳香。ネル地の袋に入れられた珈琲の粉は細く注がれた熱湯に膨潤し、むせかえるほどの芳香を放ちながら黒々とした液体を滴らす。白板に貼られた昨日の実験記録が示している一昨日までの仮説の矛盾の悩ましさと、少々の睡眠不足による気怠さ…。しかし一杯の珈琲に覚醒し立ち上がる。「さて、今日の実験は？」

昼 昨日の実験記録を検証する今日の実験の準備が整った頃、各々が弁当を持って集う。再び立ち込める珈琲の芳香。その芳香の中、新しい仮説に基づいた研究の構想に思いを廻らせ、ひとしきりの討論の後、再び各々の実験台へと散ってゆく……。昼の一杯の珈琲は食後の眠気を払い、実験の手を誤らせないように作用する。

コーヒーが廻り研究が廻る — 研究室の黒い血液……

イスラーム神秘主義の僧侶に始まるコーヒーの起源伝説から、ロンドンのコーヒーハウスで醸成された市民社会、プランテーションの奴隷労働からフランス革命へと結晶するカフェ文化……。この本では、世界史のいたるところにその時代のエッセンスのように存在するコーヒーという世界商品を通して、世界史の様々な事例が紹介されます。この本を読んでいると、フランス革命も近代市民社会も、まるでコーヒーによってもたらされたことのように思われてきます。この本は、著者があとがきで書いているように、必ずしも著者の恣意ではなかったにしろ、コーヒーの歴史から寄せ集めた事実の集積が寓話的な物語となって、世界史のある一面を浮き立たせることで、読者を興味深く奥の深い歴史の世界に誘います。私の研究室では、前述の描写のとおり、毎日、主に朝と昼、お気に入りの自家焙煎珈琲豆販売所から購入してきたコーヒー豆を手挽きし、ネルドリップで抽出しています。私たちの一日の研究の活力を生み出す原動力の一つであるコーヒーが、世界史の中でも同じような原動力として作用している — と考えると実に愉快……。コーヒーだけに爽快です。

ただ、実際に世界史学ぼうとする際には多くの切り口があり、この本の切り口は、コーヒーを主人公として常にコーヒーを前面に出した世界史のほんの一面にすぎない — ということを忘れてはいけません。もしもこの本を読もうと思われたなら、是非この点にはご注意ください。まずコーヒーを一杯飲んで、すっきりと覚醒してから読むことです！